

した「拔地」慣行の問題にあつたとみる。天保末期の大貫代官の名寄帳改め以後、この問題をめぐる争いが続き、観音寺村から村山騒動に参加した一小作人は、以前から年貢延納要求を出している人物であつた。帳簿破棄は、このような人物の土所持の回復要求の行為として重視すべきであると、この騒動の「半プロ」層の世直し説を批判している。

終章で編者の渡辺氏は、第一章から第六章の中で提示した検討内容をあらためて確認・整理し、序章であげた郡中議定の諸説との関係を取りあげている。個別の問題点や新しい見解は各章で説明したが、郡中議定研究には、議定そのものだけでなく、その前提となる村々の寄合い、郡中惣代の具体的活動、村の領主支配の実態、また、民衆運動も視野におくことで、はじめて全体像も明らかになるという提言である。

本書は、羽州村山地方の歴史像——とくに幕末には世直し騒動がみられたとする従来の見解に対し、村史料の徹底分析によって明らかにした成果であり、その手法に学ぶ点が多い。ただし、一、二の感想をあげれば、一つは村山郡全体からみたと、本書

でとりあげた山口村・観音寺村などは、いずれも生産性の低い山村に属する。郡内村々の維持救済のため、天明期にはじまり幕末まで続く「郡中備金」制度があるが、その地域全体との関連も知りたいところである。もう一つは、村山一揆と村山騒動の評価について、これまでの半プロ層を中心とする世直し騒動説の批判は説得的であるが、その地域の特性との関係、一揆史の中での時代性の説明もはしかつたと思う。評者の力不足からくる要約の不十分な点については、何分の御寛恕をいただきたい。(よこやま・あきお 山形大学名誉教授)

(A5判、四〇六ページ、九二四〇円、東京堂出版、二〇一・一二刊)

グレゴリー・スミッツ著／渡辺美季訳

『琉球王国の自画像』

近世沖縄思想史』

高良倉吉

く様変わりした、というべきだろう。薩摩・幕府による支配や中国(特に清朝)との朝貢関係という、二重の国際関係を持つ琉球を指して「日清両属」と安易に規定し、その重圧のもとで呻吟し続けた琉球という被害像を描く時代は、とうの昔に終わったからだ。

二つの大国に異なるレベルで従属しつつも、そのどちらにも回収されることなく、独自の地歩を構築しようとした小国の論理や主体性の問題を正面に据え、多様な史料や論点に立脚しながら琉球像を描こうという、気鋭の研究者たちの仕事が風靡する時代となった。この潮流におけるアプローチは、琉球の内実を詳細に把握することを目指しており、その上で、琉球史の問題を日本史や東アジア史の諸状況に連動させようとする意図に彩られている。この段階にまで来ることができたのは、沖縄出身の歴史家のがんばりは当然のことだとしても、むしろ、それ以外に出自を持つ優れた研究者たちの参画によるところが大きい。

近世琉球史をめぐる研究分野は近年大きく

十余年前の一九九九年、ハワイ大学出版局から英語で発表されたグレゴリー・スミッツ氏(ペンシルベニア州立大学)のこ

の本は、疑いなく、近世琉球史に関する新氣運を代表する成果の一つである。琉球王国の政治・行政や文化・経済の問題ではなく、あるいはまた琉球の対外関係の諸相の問題でもなく、それらの論点をふまえたうえで、琉球という小国を経営しようとした指導者たちの、理念やビジョンといった問題を本格的に提示した、初の成果なのである。大国に併呑されない、琉球の主体性確保の思想や理念とは何であつたのか、同時にまた、その際の琉球内部の葛藤はどうであつたのか。この問題を、当時のリーダーたちの言説と論理を検討することを通じて明らかにしようとした。

第一章において、琉球の中国・日本との二重的な国際関係を概観した上で、第二章で「北への眼差し」と西への眼差し」というキーワードを用いて、向象賢（羽地朝秀）と程順則（名護龍文）を検討している。第三章は、「琉球の自律性」というキーワードを駆使して、本書の中心をなす蔡温（具志頭文若）の理念と思想を丹念に検討している。第四章と第五章においては、琉球内部における蔡温理念に対する対抗の動きや言説が問題とされている。そして、エピ

ローグⅡ結論を準備し、近世において胚胎した問題の行方を、琉球処分Ⅱ沖縄県設置（一八七九年）以後の近代史を視野に入れることによって、問題の所在として確認しようとする。

第二章で論じた「北への眼差し」Ⅱ対日本との担い手であつた向象賢（一六一七―一六七五年）は、薩摩・幕府に対する主従関係はむしろ琉球にとつて将来の繁栄の基軸となるものであり、そのためには、琉球のエリート人士が日本文化を身に着け、日本に対する親和力を発揮することが不可欠なのだ、というテーゼを主張した。向象賢とは立場を異にする「西への眼差し」Ⅱ对中国の担い手であつた程順則（一六六三―一七三四年）は、中国の儒教的な理念世界を体得することにより、理想とする琉球の文化的地平を形成しようとした。図式的に言えば、新日派の向象賢と親中派の程順則の、それぞれのテーゼが併存できる段階として一七世紀があり、蔡温（一六八二―一七六一年）が活動する一八世紀になるとその状況は変化する、としている。

「琉球の自律性」を追求した蔡温は、著者の言葉を借りれば、「理想的な儒教社会が

実現すれば、琉球人はみずからの運命や将来を自分たちの掌中におさめることができ、近隣の大国とも道德的には対等な繁栄した国をつくることができる」（三二頁）と主張し、二人の先人の見解を折衷した形の、「琉球中心主義」ともいふべき思想を展開するようになった。近世琉球人の中で最も多くの著作を著し、同時にまた、その業績を伝える多くの関連史料が現存する蔡温を正面に据えて論じたこの第三章は、本書の中心をなす叙述であり、東アジアの儒学世界から蔡温を研究してきた著者ならではの卓見が、随所に発揮されている。むしろ、この章を分水嶺に、蔡温以前（第二章）と蔡温以後（第四・五章）という組み立てになっているともいえる。蔡温は、儒学者であると同時に王国の経営に深く関与した宰相（三司官）でもあつたから、思想と実践という切り口から彼の人物像を本格的に論じたものとしても、この章は圧巻である。

二つの大国に異なるレベルで従属しつつも、そのどちらにも回収されることなく独自の地歩を構築しようとした琉球王国の立場性という論点を、蔡温という指導者の思想のあり方を通して開示してみせたわけ

ある。

しかし、著者によれば、蔡温以後の琉球には、彼の論理に対立する三つの集団が登場した。王国エリートの中軸をなし、伝統を固持しようとした「首里士族」と、琉球漢学の拠点としての既得権を有したい久米村人士の一部、そして「農民」たちである。琉球内部におけるそれらの葛藤を概論したのが、第四・五章に相当する。

このように、近世琉球を思想という観点から本格的に論じ、多くの問題を投げかけたはずの著書であるにもかかわらず、残念ながら英語で書かれたために、この本は琉球史に関心を持つ人びとの元に届かず、ごく一部の例外を除くと、話題にのぼることさえなかった。最新の研究潮流に属しつつも、その成果は、研究潮流の側には蓄積されていなかったのである。

言語の壁を取り払う役目を買って出たのが、近世琉球史研究を牽引し、著書『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、二〇一二年）を持つ渡辺美季氏であった。スミッツ氏の提示を多くの人びとが共有できるよう、あえて困難な訳業を引き受けた渡辺氏に敬意を表したい。

『琉球王国の自画像』の随所において、著者は、琉球史研究者の多くが、近代的な国家像や国家的宗主権などの概念にとらわれ過ぎており、それに拘泥したままでは近世の歴史実態を正確に把握できないのではないかと、との警告を発している。国家論をダイナミズムの地平において批判的に捉えることの大事さを強調したものであり、傾聴に値する指摘だとは思う。

しかし、国土を測量して図冊を整備し、人口や戸籍調査を行って住民を把握し、海岸線や沿海を監視する制度を持ち、琉球人かそれとも他者かといった区分をも準備して経営されていたところの近世琉球王国の全体像を探ろうとする作業にとって、その批判的な指摘はいかほどの有効性を持ちうるものなのか、さらなる議論が必要だと思う。

（たから・くらよし 琉球大学法文学部教授）
（A5判、二八八ページ、四四一〇円、ペリカン社、二〇二一・一〇刊）

山本悠三著

『近代日本の思想善導と

国民統合』

高橋陽一

近代教化運動史の重厚な研究書が、論文の初出一九八〇年以後の集大成として、全五部五三八頁で刊行された。大正期から昭和戦前期までの国家と地域の間にある教化団体の動きが活写され、社会教育史、地域史研究などのさまざまな研究分野に影響を与える業績である。本書のタイトルから、文部省による思想善導施策や修身教育などのテーマが扱われているかと思つて手に取つたのだが、そう思った人にも得る知見が多く、お勧めできる。

著者は、報徳系団体をはじめ、さまざまな教化団体が、弾圧や統制とは異なる日常レベルの「思想善導」や「国民統合」を担つていく全体像を描こうとしており、一九二四（大正一三）年一月の「教化団体連合会」と、一九二八（昭和三）年四月に改組され